

つたえる つながる 高め合う授業づくり
～自ら問いを持ち続け、見方・考え方を深める社会科学習～

- 1 日時 平成30年6月26日(火) 9月14日(金)
- 2 場所 琴浦町立聖郷小学校
- 3 講師 島根大学大学院 教授 加藤寿朗 先生
- 4 研修内容

本年度、鳥取県小学校教育研究会社会科研究大会並びに中部小学校教育研究会社会科研究大会の会場校となる聖郷小学校で2回の授業研究会を開催した。小学校社会科学習の研究者としてご活躍中の加藤先生に指導助言をいただき、単元構成、授業づくりのポイントなど研修した。

1日目は、第6学年「3人の武将と天下統一」の授業研究会を通して次の事項を学んだ。

(1) 本時の授業について

歴史の資料は、憶測であり答えがわからない。教材研究をして、子どもにも考えさせる授業を実施するとよい。織田信長の政策を、つながりや関連があるものとしてとらえる。そのための入口が、本時では「鉄砲」である。学習活動のまとめとして、信長になりきり「どうしてたくさんの鉄砲をそろえることができたのですか。」の問いにインタビュー形式で答えた。子ども達は、信長の立場で進んで述べていた。発問、資料、方法は思考を深め、追究する上で大切である。しかし、それを支える「根拠を持って自分の言葉で伝え合う場の充実」の条件として、心が開放された学級集団であることの大切さを強く実感できた実践であった。



(2) 理論研修「社会科授業づくりのポイント」

追究の「視点」とそれを生かした「問い(課題)」の設定は、「社会的事象の見方・考え方」を働かせた学習のスタートであり、獲得する「知識」はこの「視点」と「問い」の質に関わってくる。

① 問いの整理

子どもの学習活動は、「問い→調べ活動→思考・判断・表現活動→知識」という順序で知識を獲得する。教師の授業づくりは、「知識→問い→調べ活動→思考・判断・表現活動」という順序で構想する。そのために教師は、まず「獲得させたい知識の整理」が必要である概念的知識を明確にする→具体的知識を整理する→「いつ、どこ、だれ、何を、どのように、どのような」の問いを作り、具体的に調べる学習活動をして、見えるもの(具体的知識)から、見えないもの(概念的知識)を獲得させる。

② 学習活動・学習過程の工夫

「調べる活動→考える活動→判断する活動→表現する活動」とする。単元が進むに連れ、「問いの発見→問いの共有→問いの深化」になるようにしたい。

「社会を知る学習→社会がわかる学習→社会にかかわる学習」へと発展していく。

③ 発問、教材・資料の工夫

「教師が学ばせたいこと」が「子どもが学びたいこと」になるように工夫する。複文型の発問が子どもの思考を促すために有効である場合が多い。問いから、思考を深

めさせるために資料の作成や提示が必要である。

④ 魅力ある教材の開発

既習の知識では説明できない資料、思考を深める資料を用意する。

2日目は、第4学年社会科「きょう土のはってんにつくす～大法づつみをひらく～」の授業研究会を通して以下の事項を指導いただき、郷土教材の単元構成と本時の授業を関連づけた助言をいただき、また一步、研究が深まった。

(1) 本時の授業について

本単元では、発展に尽くした人物が行ったことを可能な限り正確に理解する。また、行った行為を目的と手段との関係で理解し、その意味や今の生活と結び付く歴史的意義を考え理解することが、単元を通して大切である。

山下慶次郎さんたちが行った問題解決の場面を学習過程に導入し、先人の働きを追体験して、子どもたちがその時代の偉業にのめり込めるようにすることが必要である。そのためには、大きな立体模型を囲んで話し合うなどものと活用する等の工夫が必要があったのではないかと。本教材「大法堤をひらく」は、学習を進めていく上で大変価値のある教材である。また、山下慶次郎さんのひ孫さんに話を聞くことができる。単元構成や学習過程等今回の研修を活かしながら改善していき、本校の社会科学習の重要な教材として長く伝えていってほしい。



(2) 理論研修「郷土資料の授業づくりについて」

単元を「社会的意味や問題解決するための努力」「後の世の中への影響」「誇りと愛情」この3点で構成する。そして、よい面も悪い面も理解した上でこの町が好きになる子どもを育てる。

①過去の人が苦心した教材・具体例であるか見極める。

- ・「大法堤をひらく」は優れた教材である。

②現地に行ってみて見学し調べる。

- ・実際に行ってみて分かることや湧き上がる疑問がある。
- ・学習の意欲につながる。

③先人が行った問題解決する場面や働きを追体験する。

- ・先人になったつもりで問題解決を考え、話し合う。
- ・当時の道具等で働くことを実際に体験してみる。

④まとめとして表現活動を仕組む。

- ・紙芝居や劇等でいねいに偉業や思いをまとめ表現してみる。

⑤考える場面をしっかり取り入れる。

- ・ねがい（目的）と苦心しながら造った（手段）との関係を単元を通してみていく。
- ・「なぜ、こんなに苦心（苦労）したのに造ったのだろう。」
- ・その後、生活の変化によってもたらされたもの。

加藤先生による2回の研修を通して、子どもたちの問いが生まれる資料や課題提示、問いから学習問題を導き出すことなど、問いを大事にすること、考えを伝え合い、深め合う場面をどう充実させていけばよいのかを学んだ。本年度の研究発表大会に向けて、さらに研究を深め、よりよい授業づくりに取り組んでいきたい。